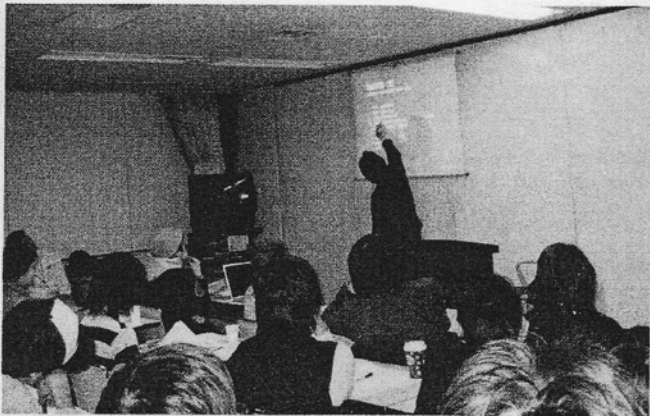


“Save the 下北沢” 報告



セイブ・ザ・下北沢の「勉強会」。
都市計画の専門家先生の説明の後、老いも若さも討論に入った。

いつの頃から、世田谷区の表玄関と言われる下北沢の駅前に「環七並の50メートル道路を通そう」という計画が持ち上がっている。またぞろ“公共土木工事”の話である。

下北沢という街は昔ながらの商店街がある一方で低層住宅が近隣を囲み、ロックやジャズ、演劇といった雑多な文化の発信地として多くの若者が集まる街として中央線の高円寺と共に君臨してきた。

何と言っても下北の魅力は若者文化と中低層建築物の街並みであり、その街並みや商店街が育む人間関係なのだと思う。だからその街は深夜であろうと安全だったし、最低限の“共同体思想”は未だ生きている数少ない街なのである。この街はシャッター通りと化し、人通りのなくなった地方の都市にとっては羨ましい限りの商店街なのである。

数十年前の悪法“大店法”の施行以来、日本の各地に息づいていた村落共同体や都市にあった“コミュニティ”はほとんど崩壊してしまった。いわゆる人間の尊厳とかコミュニケーションなどは重要ではなく、経済のグローバルゼーション（利益中心主義）こそが最大限重要なことになってしまっているのだ。

東京の端を流れる多摩川では、自然の流れを取り戻すべく過去コンクリートで覆った川べりを剥がす工事をしていて、それとは正反対に沖縄では人口7,000人の村に400もの土建屋が出来ている。いわゆる島全体の“公共工事＝土木工事化”に島民全体が煽られているのだ。もう誰も地道な農業や漁業をやらなくなって、すぐ金になる公共事業に群がっている始末なのだそうだ。

今、下北沢の街は大騒ぎである。高齢化した下北沢の地権者は、損得ずくで自分の得られる利益で下北沢を出てゆこうとしているし、当然世田谷区が押し進める再開発計画によって環七級の道幅の道路が駅前まで走れば、街は大幅に分断され高層ビル街になる。道路を“回遊”するコミュニケーションあふれる街作りではなく、またもや自動車物流優先のまさに“土木工事”ありきの計画なのである。当然、街は小田急線下北地域地下化工事にかかる10年も合わせて、またこの先数十年下北沢中が土木工事一色になるのである。

そもそも、今度の世田谷区長は最悪なことに道路建設促進を公約に当選した人である。その世田谷区官僚達は旧態依然とした地元商店街の了解を得るだけで工事を進めようとしている。そこで「ちょっと待ってくれ！ 私達もこの街の再生には意見がある。私達も参加させて」と手を挙げて活動し始めたのが“Save the 下北沢”という下北を愛する人達なのである。

12月も押し迫った夜、私は音楽評論家の志田 歩さんに誘われてこの集会に参加してみた。何と会議場には若い人から年寄りまで40人近くが参加していて、熱心に議論している情熱にはびっくりした。今のところこの“Save the 下北沢”が提出している数々の提案には世田谷区や地元商店街は全く無反応で、無視を決め込んでいる。多くの税金を使うことを含めて、この下北沢再開発計画を一部の利権団体と区役所、商店街ボスの密室での計画に終わらしてはならないと思う。私も下北沢に店を持っている関係から、ちゃんとこのグループに参加してみようと思っている。

「ざわざわと人の集まるこの街を、大きな道路が踏みつぶしてゆく。しもきたを愛するものたちよ、今立ち上がろう！」と“Save the 下北沢”の人達は今日も下北を愛する人達に訴えかけている。

“Save the 下北沢” ホームページ <http://www.stsk.net/>

何か希望をあまり持てないような気がする新年になりそうだけれど、“国家”とか“組織”“民族”とかあまり信用できない世の中になってしまって悲しいけれど、防衛策はそんなことには惑わされない何事にも負けない“強い自分”を作るしかなくて、でもきっと2005年はどこかで“跳べる”隙間を見つけて、より良い明日を“想造”してアクティブに生きて行きたいと思う。

2005年新年

ロフト席亭 平野 悠

<http://www.loft-prj.co.jp/OJISAN/>